

「有機農業」実践目指す

佐賀市 農業者をはじめ、有機野菜などの販売を目指す人や消費者らでつくる多職種の学習グループ「げんきな大地」が佐賀市に発足した。「大地に学ぶ」という姿勢で有機農業の実践研究を積み、農家とのネットワークづくりや販路開拓を目指す。26日には一般向けの初イベントを開く。

佐賀市

多職種の7人学習会

同会は昨年度、市が開いたながら学ぶ人もいるため、有機農業研修に参加した40月2回、夜の時間帯に勉強60歳代の卒業生7人が会を開催。嘉瀬町には約40「もっと学びたい」と自主的の實習田を確保し、技術力に立ち上げた。会社勤めをしを磨いている。



今春発足した「有機農業を学ぶグループ「げんきな大地」のメンバー。佐賀市嘉瀬町の實習田

消費者へPRも 實習田で技術磨く

兼業農家で会の代表を務める同市の大坪一樹さん(49)は「単純に収量を求める方法では、土がやせ細った。従来の農業の姿でいいのだろうか」と疑問を持ったのが有機農業に目を向けたきっかけと話す。作る側だけではなく、消費者にも環境問題や有機農業を一緒に考えるきっかけにと、初めて企画したイベントは26日午後1時から同市のメイトプラザで。元佐賀大農学部教授の田中欽二さんが講演するほか、「タマネギ」を主役に自然からのメッセージを織り込んだ劇を上演。参加費は200円。問い合わせは電話0952(60)1356。

(川崎久美子)

2012
H20120420

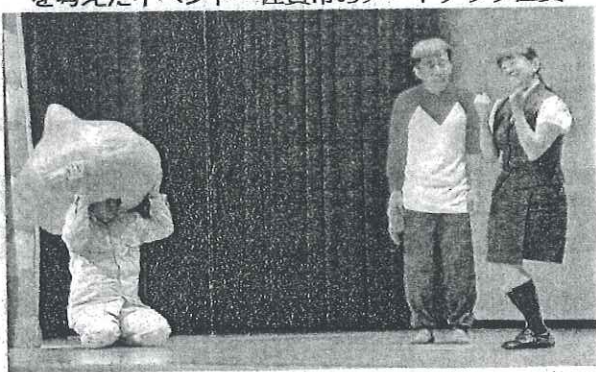
土壌にやさしい農業を考える 26日にイベント
土壌への悪影響が少ないう農業について考えるイベントが26日午後1時から、佐賀市のメイトプラザで開かれる。専門家らによる自然農法の講演や化学肥料を大量に使う農業への懸念を表現した演劇の公演、和太鼓演奏などがある。

佐賀大学で農学博士を取得し、世界各地で農業を指導しているJICA職員の高橋嘉さんと、同大農学部を退官後、同市三瀬村で自然農法を実践している元教授の田中欽二さんが講演する。

佐賀新聞

劇や講演で農考える

「有機農業グループ「げんきな大地」競争力強化の訴えも」
土壌への悪影響について考えるイベントが26日、佐賀市のメイトプラザ佐賀で開かれた。有機農業を学ぶ市民グループ「げんきな大地」が初めて開催。講演や土作りの大切さを訴える手作り劇などを通して、化学肥料を使い続ける農業のあり方に疑問を投げ掛け、これからの農業を考えた。



グループの代表、大坪一樹さん(49)が書き下ろした劇は、有機栽培でタマネギ

を作る農業男性を「土は命の源」「食べ物対に工業品になってはい」とのメッセージを説んだ。環太平洋連携協定(PAP)交渉参加問題には「対」の姿勢を貫きながら信用力を高め、国際競争力も訴えた。

講演したJICA職員高橋嘉さんは、需要に供給していないアフリカなどで、米の品種改良を稲作支援を進めているなどを紹介した。イベントは140人が参加。代表の大坪さんは「参加者から安心と一緒に考えていきたい」という声をもらった。話が続いていき「と手語った。」

(川崎久)

昨年度、佐賀市主催の有機農業研修に参加したメンバーらでつくるグループ「げんきな大地」主催で、代表の大坪一樹さんは「一般の人にも有機農業を知ってもらえらば」と話す。入場料200円。問い合わせは同サークル事務局、電話0952(60)1356。